

# 小児看護学教育における乳幼児と母親を教育ボランティアとして 導入した授業の効果

## － 5 年間の学生と教育ボランティアの感想・意見から－

二宮啓子<sup>1\*</sup>，内 正子<sup>1\*</sup>，辻佐恵子<sup>1\*</sup>，丸山浩枝<sup>2\*</sup>，宮内 環<sup>3\*</sup>，庄司靖枝<sup>4\*</sup>

<sup>1\*</sup>神戸市看護大学，<sup>2\*</sup>神戸市立医療センター中央市民病院，<sup>3\*</sup>金沢医科大学，<sup>4\*</sup>神戸常磐大学保健科学部

キーワード：小児看護学、学生、乳幼児、母親、教育効果

## The Effects of the Class Bringing in Volunteers by Infants and Their Mothers for Child Nursing Education －From the Perspective of the Students and Volunteers for 5 Years－

Keiko NINOMIYA<sup>1\*</sup>，Masako UCHI<sup>1\*</sup>，Saeko TSUJI<sup>1\*</sup>，Hiroe MARUYAMA<sup>2\*</sup>，  
Tamaki MIYAUCHI<sup>3\*</sup>，Yasue SHOJI<sup>4\*</sup>

<sup>1\*</sup>Kobe City College of Nursing，<sup>2\*</sup>Kobe City Medical Center General Hospital，

<sup>3\*</sup>Kanazawa Medical University Faculty of Nursing，

<sup>4\*</sup>Kobe Tokiwa University Department of Public Health Sciences

Key words：child nursing, student, infant, mother, educational effect

### I. はじめに

近年の少子化や核家族化、地域での人との関係性の希薄化に伴い、育児不安を持つ親の増加、児童虐待などが社会問題となっている。これらの要因の1つとして、周囲に子どもが少ない環境やきょうだいがいない一人っ子の増加により、乳幼児と直接ふれあう体験をもたないまま成長し、子どもへの接し方がわからない、子どもに関わることを不安に思う大人が増えていることが挙げられる。このような状況は、将来、母子保健や小児看護に携わり、子育て支援者となる看護学生にも同様であることが考えられる。看護学生の子どもの接触体験について調査した結果では、子どもとの接触体験がなかった者は、1997年では10%であった（上山，1999）が、2009年では24%であったこと（今村，2010）が報告されており、対象者が異なるため単純には比較できないが、子どもとの接触体験がない学生が増加してきていると言えよう。また、看護学生の子育て観は否定的な内容が76%であったこと（今村，2010）が報告されており、子どもとの接触体験が少な

く、子どもへのマイナスイメージや苦手意識を持つ傾向があることが述べられていた。

一方、神戸市看護大学では、平成18年度より学生が地域住民とのふれあいを通して看護を学び、また地域住民の健康づくりにも貢献することができる教育プログラムを実施している。その一つとして、地域住民に看護学教育への参加を募り、彼らを教育ボランティアとして導入した授業を実施している。

小児看護学教育で実施されている教育ボランティアを導入した授業に関する論文を検索してみると、過去10年で3論文（森戸，2007；奥山，2006；今村，2010）と少なく、いずれも小児がんで子どもを亡くした母親や障害児の母親、子育て中の親の体験談を聴講した効果についての内容であり、乳幼児を導入した授業の効果に関する論文はなかった。そこで、今回、乳幼児の母親からの体験談だけでなく、実際に乳幼児とふれあう体験を導入することによりさらに教育効果が高まるのではないかと考えた。効果的な教育方法を開発することは、授業時間数が少なくなっている小児看護学教育にとって重要である。

本研究では、平成18～22年度の5年間に実施した乳幼児とその母親を教育ボランティアとして導入した授業の効果として、学生への効果と教育ボランティアへの波及効果について明らかにすることを目的とした。

## II. 方法

### 1. 研究デザイン

質的記述的デザイン

### 2. 対象者

平成18年度から平成22年度の間に、乳幼児とその母親を教育ボランティアとして導入した授業に参加した学生（在来生および編入生）と教育ボランティア。

### 3. 教育ボランティアを導入した授業

#### 1) 目的

- (1) 実際の乳幼児を観察すること、母親から乳幼児の生活や子育ての話を聞くことにより、これから行う乳幼児の成長・発達、家族を含めた看護の必要性など、授業内容の理解を促すこと
- (2) 学生にインパクトを与え、小児看護に関心を持ってもらうこと

#### 2) 実施時期

1年次後期の小児看護学の最初の授業科目である小児健康生活支援論Ⅰの1～3回目の時期に1回実施した。

#### 3) 実施内容

##### (1) 講義

1～3名の母親に15～35分間「子どもが健康な生活を送るためにやっていること」というテーマで、子どもの生活、子どもの健康を維持するための工夫、子育てで困ったことや楽しいことなどの体験談を話してもらった。

なお、平成18年度は乳児の母親のみであったため、乳児期の子育て体験談のみであったが、平成19年度以降は、乳児期と幼児期の両方の体験談が聞けるように教育ボランティアの選定を行った。幼児の母親には子どもの1歳前後から現在までの体験談を話して頂くように事前をお願いした。

##### (2) ふれあい体験

講義の後、実習室に移動し、学生を3～4グループに分け、各グループに乳児もしくは幼児と母親のペアを配置し、小児看護学担当教員がファシリテーターとして入った。学生には母親のそばで乳幼児と遊んだり、

抱っこやおむつ交換等を行ったり、母親に質問したりして、30～50分間ふれあい体験ができるようにした。

### 4. 調査方法

学生には、教育ボランティアを導入した授業の前に研究についての説明を行い、白紙の用紙を配布し、授業の終了時に感想を自由に記述し回収箱に提出するように依頼した。その際、氏名の記入は必要ないことを説明した。教育ボランティアには、「自分が地域の役に立っていると実感できたか」、「今後も教育ボランティアに参加したいと思うか」の2つの項目については、「思う」「思わない」「どちらでもない」からの選択回答、及び参加した動機や授業の感想についての自由回答を含む簡単なアンケート調査を無記名で実施した。

### 5. 分析方法

学生の自由記載の内容から教育ボランティアを導入した授業の学びや授業に対する学生の反応・評価を含む文節を抽出した。その後、研究者が文節の意味内容を表すコードを表現し、各コードの意味内容の類似性に着目して、サブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリーを生成した。学生の自由記載の内容は、教育ボランティアの講義の内容や参加した子どもの年齢・人数による違いがあることから、年度ごとに分析し、最後に全体を統合した。また、教育ボランティアの記述内容についても、学生の自由記載の内容と同様に、授業に対する教育ボランティアの反応・評価を含む文節を抽出し、意味内容が類似しているコードに着目して、サブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

分析にあたっては、共同研究者と意見交換し、結果の真実性を確保するようにした。

### 6. 倫理的配慮

学生および教育ボランティアの研究依頼にあたり、教育ボランティアを導入した授業の評価に用いること、無記名であること、記載の有無は自由であること、報告書に記載し、学会等で公表することを口頭で授業の前に説明した。学生には、成績評価とは関係がないことを追加して説明した。また、調査用紙の提出をもって承諾が得られたものとした。

## III. 結果

### 1. 対象者の背景（表1）

授業に参加した学生数は、1年生398名と編入3年生41名、計439名であったが、調査用紙の提出があっ

表 1. 対象者の背景

項目		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	合計
学 生	学生数	90名	112名	83名	79名	75名	439名
	回答数（回収率）	86名（95.5%）	96名（86%）	68名（81.9%）	77名（97.5%）	61名（81.3%）	388名（88.4%）
教 育 ボ ラ ン ティ ア	親の数	3名	4名	4名	4名	5名	20名
	回答数（回収率）	3名（100%）	3名（75%）	4名（100%）	4名（100%）	4名（80%）	18名（90.0%）
	子どもの数	3名 （乳児3名）	4名 （乳児3名、幼児1名）	4名 （乳児2名、幼児2名）	5名 （乳児2名、幼児3名）	4名 （乳児2名、幼児2名）	20名

た数は、388枚、回収率は、88.4%であった。また、各年度の調査用紙の回収率は81.3～97.5%であった。

教育ボランティアの参加者数は20名で、調査用紙の提出があったのは18枚、回収率は、90%であった。また、教育ボランティアの参加者には2回参加したものが2名含まれていた。

## 2. 教育ボランティアを導入した授業の学生への効果

学生の自由記載の分析の結果、表2に示すとおり、37のサブカテゴリーから、10のカテゴリーが、さらに3つのコアカテゴリーが生成された。以下の記述では、コアカテゴリーは【】、カテゴリーは<>、サブカテゴリーは□、コードは「」で示す。

### 1) 【現実世界への目覚め】

このコアカテゴリーは、3つのカテゴリーから生成された。学生が教育ボランティアを導入した授業を受講することにより、子どもの反応に感動したり、乳幼児をもつ母親の実際の子育て体験や出産に伴う母親の実際の気持ちを理解したりしていた。それは、自分たちがこれまで知らなかった現実世界に触れ、目覚めたことを意味していた。

#### (1)<子どもの反応に対する感動>

このカテゴリーは、「赤ちゃんは音が聞こえる方に反応を示したり、笑ったりしているところがとてもかわいく、自分のやったことに気づいてこっちに来てくれたときは嬉しかった」などの「子どもの反応に対する感動」、「あんなに小さいのにすごく元気で動いているし、何にでも興味津々で、すごくかわかった」などの「子どもへの好意的な感情」、「歩き方を覚えたばかりとのことで、手を挙げながらバランスを取っている姿に癒された」などの「子どもに対して感じる癒される体験」の3つのサブカテゴリーから生成された。

#### (2)<子どもをもつ母親の実際の子育て体験の理解>

このカテゴリーは、8つのサブカテゴリーから生成された。サブカテゴリーとしては、「腱鞘炎になった

とき、お母さんの気持ちが子どもに伝わりお利口さんでいてくれたと言うこと、お母さんが楽しいと子どもも楽しいと感じること、親子の関係性や子どもの感受性はすごいと思った」などの「母親と子どもの絆の実感」、「子育てが大変って言うことをよく聞いていたが、それ以上に子育てをしていて嬉しいことの方が多いと言うことを聞いて良かった」などの「子育てにおける母親の楽しさ」、「お母さんは、赤ちゃんのリズムに合わせないといけなくて、寝たりお風呂に入ったりするのがとても不規則になってしまうと知り、お母さんになるのは本当に大変なんだなあ実感した」などの「子育てにおける母親の大変さ」があった。他に、「腹が立つことも確かにあるけど、この子が大好きですという言葉に感動した」や「頭がよいことよりも健康でいてくれることを一番願っていることが伝わってきた」などの「母親の子どもへの思い」、「最初から母親というわけではなく、子どもと一緒に自分も母親として成長していくという言葉が印象的であった」という「子育てを通しての母親の成長」、「母親の観察力はすごいと思った」などの「母親に対する尊敬」、「元気に育ててほしいと思っていても、元気すぎてけがをしないかと心配していることを知って驚いた」などの「子育てに対する母親の複雑な思いの実感」、「3人それぞれの子育ての仕方や考え方が異なっていたけれど、どれが正しい、間違っているのではなく、それぞれ思っているやり方でたくさんの工夫をされ、子育てを楽しまれていることが分かった」などの「母親の子育て体験の多様性の実感」のサブカテゴリーが含まれていた。

#### (3)<出産に伴う母親の実際の気持ちへの理解>

このカテゴリーは、「子どもを授かることは、とても難しいし大変なことなのだからこそ、私たちは命を大切に、また子どもを大切にしていかなければならないと思った」という「命の尊さの実感」、「高齢になると出産への不安は大きくなるのだなあと思った」と

表 2. 教育ボランティアを導入した授業の学生への効果

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
現実世界への目覚め	子どもの反応に対する感動	子どもの反応に対する感動
		子どもへの好意的な感情
		子どもに対して感じる癒される体験
	子どもをもつ母親の実際の子育て体験の理解	母親と子どもの絆の実感
		子育てにおける母親の楽しさ
		子育てにおける母親の大変さ
		母親の子どもへの思い
		子育てを通しての母親の成長
		母親に対する尊敬
		子育てに対する母親の複雑な思いの実感
		母親の子育て体験の多様性の実感
	出産に伴う母親の気持ちへの理解	命の尊さの実感
		高齢出産への不安の実感
小児看護の理解	子どもの成長・発達を理解	乳児の成長・発達の理解
		幼児の成長・発達の理解
		発達段階の違いによる成長・発達の理解
		成長の速さ
		個性の理解
		男女差の理解
		イメージを覆す子どもの姿
		具体的な子どもの成長・発達の実感
		子どもを理解することの難しさ
		きょうだいとの関係の理解
	子どもや母親への看護師としての支援のあり方	周囲の協力や支援の必要性
		母親への看護師としての支援のあり方
	既習の内容と実際との関連づけ	子どもへの看護師としての支援のあり方
		既習の内容と実際との関連づけ
体験を通しての学び	普段の授業では学べない現実の体験	普段聞けない子育て中の母親の生活の話が聞けたこと
		子どもとのふれあい体験
		子どもに対するいろいろな発見による楽しい学び
	小児看護の実践への意欲	小児看護への関心の高まり
		子どもへの積極的なかわり
	自分の家族に関連した体験の想起	過去の体験との照合
		自分の親への感謝の気持ち
	自分の将来の姿への想像	親になることへの憧れ
		自分の将来の生活の見通し
		自分の将来に役立つ話

いう「高齢出産への不安の実感」の2つのサブカテゴリーから生成された。また、このカテゴリーは、教育ボランティアの特性によるものであり、その教育ボランティアが参加した年度のみ抽出されたカテゴリーであった。

## 2) 【小児看護の理解】

このコアカテゴリーは、3つのカテゴリーから生成された。学生は教育ボランティアの話を聞いたり、ふれあい体験を通して乳児や幼児の成長・発達の違いや個人差などを実感したりして、子どもの成長・発達を理解し、子どもや母親への看護師としての支援のあり方を考えていた。そして、既習の内容を実際の親子の姿と関連づけながら、小児看護学の学習内容を理解していることを意味していた。

### (1) <子どもの成長・発達の理解>

このカテゴリーは、10のサブカテゴリーから生成された。サブカテゴリーとしては、「つかまり立ちがで

きたり、器用に物を掴んだりすることができていた」などの「乳児の成長・発達の理解」、「4歳はパズルができる。3歳の子は次から次へといろいろなものに興味を持ち遊んでいた」などの「幼児の成長・発達の理解」、「乳児期と幼児期でこんなにも（発達に）差が出てくることにまず驚いた」などの「発達段階の違いによる成長・発達の理解」があった。他に、「数ヶ月の違いでも成長面では差があるので、子どもの成長の早さを感じました」などの「成長の速さ」、「一人一人に個性があることが分かり、勉強になった」という「個性の理解」、「男の子はすごい元気。元気すぎてびっくりした。男の子と女の子の違いを感じた」という「男女差の理解」、「思っていた以上に手足の力が強く、しっかりと握ってくれたり、床を蹴ってジャンプしているのがすごかった」などの「イメージを覆す子どもの姿」、「歯の生え方や手のつかみ方など、近くで見たことがなく、見れてとてもよかった」などの「具体的な子



もの成長・発達の実感]、「子どもは言葉で訴えられないから大変だ。子どもの言語を理解するのは難しい」などの「子どもを理解することの難しさ」、「赤ちゃんのために手洗いを頑張っているお兄ちゃんはいらい」という「きょうだいとの関係の理解」のサブカテゴリが含まれていた。

#### (2)＜子どもや母親への看護師としての支援のあり方＞

このカテゴリは、「お母さんは、子育てをしたり、家事をしたりすることがいっぱいなので、周りの人の協力が必要不可欠」「親同士のネットワークやコミュニケーションが育児をする上で大切であることに気づいた」などの「周囲の協力や支援の必要性」、「あらゆる知識を提供すればいいわけではなく、お母さん達が必要としていることをアセスメントしてかわり、お母さんが子育てが楽しいと思えるような支援をしていかなければと思った」などの「母親への看護師としての支援のあり方」、「聴診器を見ると、お母さんの元に逃げていったところを見て、将来子どもを診察するときは、なるべく怖くないように工夫する必要があるのだと学んだ」などの「子どもへの看護師としての支援のあり方」の3つのサブカテゴリから生成された。

#### (3)＜既習の内容と実際との関連づけ＞

このカテゴリは、「授業で習ったとおり（4歳児は）イヤダイヤダ言っており、成長過程を理解できた」などの「既習の内容と実際との関連づけ」の1つのサブカテゴリから生成された。

#### 3) 【体験を通しての学び】

このコアカテゴリは、4つのカテゴリから生成された。学生が実際に子どもとふれあったり、普段聞けない子育て中の母親の話を聞いたりすることにより、小児看護への関心が高まり、小児看護の実践への意欲につながっていた。また、学生が教育ボランティアの話を聞き、乳幼児とふれ合う中で自分の家族との体験を思い出して比較したり、自分が親や看護師になる将来の姿を想像したりしていることを意味していた。

#### (1)＜普段の授業では学べない現実の体験＞

このカテゴリは、「普段、乳幼児の母親の話を聞く機会はなかなかないので、すごい良い時間だった」という「普段聞けない子育て中の母親の生活の話が聞けたこと」、「抱っこさせてもらったり、普段できない経験ができて良かった」などの「子どもとのふれあい体験」、「赤ちゃんを見ているといろいろな発見があって本当に楽しかった」という「子どもに対するいろ

ろな発見による楽しい学び」の3つのサブカテゴリから生成された。

#### (2)＜小児看護の実践への意欲＞

このカテゴリは「成長発達に興味をわいた」という「小児看護への関心の高まり」、「初対面から少しなれるまで時間がかかったが、どうしたら仲良くなれるかなと考えながら関わった」など「子どもへの積極的なかわり」の2つのサブカテゴリから生成された。

#### (3)＜自分の家族に関連した体験の想起＞

このカテゴリは、「上のお姉さんの焼きもちがとても現実的で自分が小さい時を思い出した」という「過去の体験との照合」、「私が赤ちゃんの頃もこんなに手がかかったんだろうなと思うと親に感謝しなくてはいけなかったと思いました」などの「自分の親への感謝の気持ち」の2つのサブカテゴリから生成された。

#### (4)＜自分の将来の姿への想像＞

このカテゴリは、「早く自分もお母さんになりたいと思った」などの「親になることへの憧れ」、「看護師になったら、どのくらい産休が取れるのか、職場復帰できるのか気になっていたので知ることができて良かった」という「自分の将来の生活の見通し」、「いろいろな母親に直接話を聞くことができ、接することができたことは大変良かったし、話してくれた内容は将来役に立つと思う」などの「自分の将来に役立つ話」の3つのサブカテゴリから生成された。

### 3. 教育ボランティアを導入した授業に対する学生の要望

これは2つのカテゴリから生成され、ふれあい体験の時間が少ないことや異なる発達段階の子どもとのふれあいができないことなどの教育ボランティアとのかかわりが十分できないことへの授業の改善と貴重な教育ボランティアを導入した授業の継続を意味していた。

また、教育ボランティアとの不十分なかかわりについで記述は、ふれあい体験の子ども数に対する学生数が多かった平成18・19年度に比べ、20年度以降は減少していた。

#### 1) ＜教育ボランティアとの不十分なかかわり＞

このカテゴリは、「3カ月の赤ちゃんを皆で回して抱っこしたが、1人30秒ぐらいしか抱くことができなかった。もっと抱っこしたかったので、1グループの人数を減らしてほしい」などの「ふれあい体験の時間の不足」、「発達段階の違う子どもとふれ合いたかっ

た」という[異なる発達段階の子どもとのふれあいの不足]の2つのサブカテゴリーから生成された。

## 2) <貴重な授業の継続>

このカテゴリーは、「またこのような授業を是非やってほしい」という[教育ボランティアを導入した授業の継続]、「良い体験ができた。貴重な体験で充実していた」などの「貴重な体験による充実感」の2つのサブカテゴリーから生成された。

## 4. 授業に参加することによる教育ボランティアへの波及効果

### 1) 地域の役に立っているという実感について

「今回の教育ボランティアに参加して、自分が地域の役に立っていると実感できましたか」の問いに対しては、できたと思うと回答した人は18名中11名(61.1%)で、どちらとも言えないと回答した人が7名(38.9%)であった。

### 2) 今後の教育ボランティアへの参加について

今後もこの教育ボランティアに参加したいと思いませんかの問いに対しては、参加したいと思うと回答した人が18名中17名(94.4%)で、1名(5.6%)はどちらとも言えないと答えていた。

### 3) 教育ボランティアの参加動機や授業の感想

教育ボランティアの自由記載の分析の結果、表3に示すとおり、10のサブカテゴリーから、4つのカテゴリーが生成された。

表3. 教育ボランティアの参加動機と授業の感想

カテゴリー	サブカテゴリー
学生の自分や子どもへの関心	自分の話への学生の熱心な傾聴
	学生の自分の子どもへの関心
地域貢献への思い	自分が地域の役に立てばうれしいとの思い
	自分が地域の役に立っているとの実感
自分や子どもへの利益	他の母親の話を聞くことによる子育てへの学び
	学生が及ぼす子どもへの効果
学生の反応の評価	学生の肯定的な反応
	積極的な学生と消極的な学生が存在
	学生の消極的な反応
	教科書と実際の子どもとの統合の難しさ

### (1)<学生の自分や子どもへの関心>

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから生成され、学生が自分の話を熱心に聞いてくれたこと、子どもに関心を持って接してくれたことを意味していた。

2つのサブカテゴリーは、「学生が自分の話を熱心

にメモを取りながら聴いてくれた」、「静かにとても真剣に話を聴いてくれた」という[自分の話への学生の熱心な傾聴]、「ふれあい体験では息子に興味を持って接してくれ、嬉しかった」という[学生の自分の子どもへの関心]であった。

### (2)<地域貢献への思い>

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから生成され、自分が地域の役に立てばうれしいと思って教育ボランティアに参加し、自分が地域の役に立っていることを実感できたことを意味していた。

2つのサブカテゴリーは、「現在仕事をしていないので、時間があるうちに何かのお手伝いができればと思い、参加した」という[自分が地域の役に立てばうれしいとの思い]、「今回の教育ボランティアに参加して、自分が地域の役に立っていると実感できた」という[自分が地域の役に立っているとの実感]であった。

### (3)<自分や子どもへの利益>

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから生成され、教育ボランティアとして参加することにより、子育ての先輩である他の母親の話を聞くことができ、自分自身の学びになったことや学生に子どもをあやしたり、遊んだりしてもらうことにより子どもへの利益があると感じていることを意味していた。

2つのサブカテゴリーは、「他の母親の話を聞くことで、これから自分と子どもにどのようなことが起こるのかが分かり、自分自身も勉強になった」という[他の母親の話を聞くことによる子育てへの学び]、「温かく相手をして頂いて息子もかなり喜んでいたように見えました」という[学生が及ぼす子どもへの効果]であった。

### (4)<学生の反応の評価>

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーから生成され、学生の授業への取り組みの姿勢は、積極的に取り組んでいる学生も多いがその反面、消極的な学生も多く、教科書と実際の子どもとの統合が難しいように思っていることを意味していた。

4つのサブカテゴリーは、「学生は、とっても生き生きとしていてよかった」という[学生の肯定的な反応]、「学生は熱心な人と遠慮がちな人がいた」という[積極的な学生と消極的な学生が存在]、「学生の子どもへのかかわりは消極的でしたが、フレッシュな感じでした」という[学生の消極的な反応]、「教科書の内容と実際の子どもとの状態を結びつけるのは難しいのか

なと思った」という「教科書と実際の子どもの統合の難しさ」であった。

#### IV. 考察

##### 1. 乳幼児と母親を教育ボランティアとして導入した授業の効果

中谷ら（2008）は、3年間の当事者参加授業の学びについて調査した結果、病気と向き合っている姿に感動した等の「感情の側面」が最も多く48.0%、次いで「知識の側面」の35.0%、「価値観の側面」の13.7%であったことを明らかにし、他の授業形態では学習がたい情意面の学習内容が認められたことを述べている。本研究の乳幼児と母親を教育ボランティアとして導入した授業の学びでも、【現実世界への目覚め】【体験を通しての学び】というコアカテゴリーが抽出され、単に子どもの成長・発達、母親の子育ての体験や支援ニーズを理解するという知識を得るだけでなく、リアリティのある体験により感情が揺さぶられ、体感的な学びになっていた。これは、教育ボランティアの話を聞いたり、触れ合ったりすることによって、いつもとは異なる授業環境が作られ、学生は責任感や緊張感を感じながら授業を受けたり、感動したりすることができ、その中で自ら主体的に学ぶことにより、多くの学びが得られたと考えられる。江川ら（2010）が、感動したり、緊張感を持って臨んだ授業は、学生にとって忘れ得ない体験となって刻み込まれると述べているように、教員が講義で話すという教育方法での知識提供による学びに比べ、記憶に残りやすく維持されやすいと考えられる。また、＜普段の授業では学べない現実の体験＞を通して楽しく学ぶことは、学生の学習意欲を高める上で非常に大切な要素である。楽しく学ぶことに加えて、これまで授業で学んでいた知識の裏付けを得ることができたこと、学んだ知識を実践する機会が得られたことにより、教育ボランティアを導入した授業の目的として掲げていた小児看護学の学習の動機づけを達成することにつながったものと考えられる。

しかし、教育ボランティアの学生の反応に対する評価では、講義では学生の肯定的な反応を捉えている一方で、ふれあい体験では「すごく積極的な学生さんもいるが、消極的な学生さんもいる」のように、学生の授業に対する姿勢には個人差があることを指摘していた。子どもとの接触体験が少ない学生ほど子どもの行

動特性から来るイメージは否定的であったと報告されており（野村、河上、長谷他、2007）、子どもとの接触体験が少ない学生には、子どもの成長・発達や母親の体験や支援ニーズを理解できたとしても、短時間で積極的に行動することは難しいように思われる。今村ら（2011）は地域の親が看護学生に子育て体験を語るワークショップによって学生が子育て観を否定的から肯定的へと変化させただけでなく、子どもへの理解を深めるとともに子育て観を多角的にとらえ、学生自らが子育て支援の必要性に気づくなどの変化があったことを報告している。そのため、実際の子どもや子育て中の母親とふれあい体験をもつことは、子どもとの接触体験が少ない学生に子どもや子育て中の母親に対する視野を広げ、認識を変容させるために有効であると考えられる。

【体験を通しての学び】の＜自分の家族に関連した体験の想起＞と＜自分の将来の姿への想像＞については、教育ボランティアを導入した授業により、当事者の視点にたって、これまでの自分自身の経験との照合をしていた。学生が親から子育て体験を聴くことにより、親の大変さを追体験し、その結果、自分自身の親への感謝の気持ちが生まれ、さらに、子育て観が肯定的に変化することにより、母親になることへのあこがれを感じたものと推察される。

また、特定の年度にのみ抽出されたカテゴリーとして、＜出産に伴う母親の気持ちの理解＞があった。これは、参加した教育ボランティアの体外受精や高齢出産に伴う個人の体験の特性により抽出されたものであり、どの乳幼児の母親からでも学べる内容ではなかった。このように教育ボランティアを導入した授業の学びは、教育ボランティアの特性によって影響されること、学生の気づきに個人差があることは否めないが、実体験からの学びの有用性は、多くの研究で指摘されている。そのため、教育ボランティアの特性を生かすとともに、ある程度共通した学びが得られるように講義に入れてほしいポイントを提示したり、複数の教育ボランティアから講義をしてもらうなどの教育上の工夫が教育効果を上げるためには必要であろう。

##### 2. 教育ボランティアへの波及効果

教育ボランティアの感想から抽出されたカテゴリーとして、＜学生の反応の評価＞以外に、＜学生の自分や子どもへの関心＞、＜地域貢献への思い＞、＜自分や子どもへの利益＞が抽出された。乳幼児を持つ母親

は、一生懸命子育てを頑張っているにもかかわらず、認めてもらえることが少なく、社会の一員としての自分の存在を自覚しにくい。山口ら（2010）は、乳幼児をもつ親が子育て体験を看護学生に語る中で、子どもの発達に感動したり、子どもに癒されている自分に気づき、大変であった子育てを頑張ったと、親自身が自己を賞賛し自尊感情を高めることにつながっていたと述べている。本研究でも同様に、教育ボランティアとして参加したことにより、学生が自分の話を熱心に聞いてくれたり、子どもに関心を持って接してくれたりを嬉しく思い、自分が頑張っている子育ての日々の生活の意味を認識する機会となっていた。また、そのことが18人中11人に自分が地域の役に立っていると実感できたという「社会貢献への思い」につながったと考えられる。さらに、今回の授業では、子育て中の複数の乳幼児の親子を導入したこと、年齢の異なる乳幼児を導入したことから、教育ボランティアとして参加した母親の中には、子育ての先輩である教育ボランティアの母親からの体験談を聞き、将来の自分の子どもの姿を想像できたことにより、今後の子育ての展望が見えた者もいた。

以上のことから、教育ボランティアを導入した授業は学生のみへの効果ではなく、波及効果として教育ボランティア自身への子育て支援にもつながっており、両者にとって有効な教育方法であると考えられる。

### 3. 教育ボランティアを導入した授業における課題

教育ボランティアを導入した授業の課題として、教育ボランティアとの不十分なかかわりが抽出された。これは教育ボランティアを導入した授業の中でも特にふれあい体験において、学生数に応じたボランティア数を確保することが困難であることから生じた問題である。このことは本田ら（2009）も、模擬患者参加型授業の課題として「看護師役を体験できる学生数は限られている」ことを指摘しており、演習に教育ボランティアを導入した授業を展開する場合の共通の問題であると言える。一方、児玉ら（2009）は、この問題を解消するための試みとして、コミュニケーション技術演習に母親役の模擬患者を導入し、学生全員に対応する形で実施している。その結果、学生は緊張感を持ちながら実施し、「新しい発見があった」「有益であった」「興味深かった」と評価し、満足できる演習であったといえる一方、学生1名あたり2分間という限られた時間になったことから、思うように実施できなかった

不満感が一部の学生にあったことが報告されている。本研究においても、5年の間に学生の学びを高めるために授業方法の改善として、可能な限りふれあい体験の際の教員数と教育ボランティアの人数を増やして実施した。その結果、教育ボランティアとの不十分なかかわりを記述する学生数は減少していた。今回の教育効果を考えると、学生の要望通り教育ボランティアの数を増やしたいところであるが、今後、こうした学生の要望に添うかどうかは、授業の運営上の負担に見合った教育効果があるかどうかを含めて検討していく必要がある。

## V. 本研究の限界と課題

本研究は、乳幼児をもつ母親が教育ボランティアであるため同じ教育ボランティアに継続して授業に参加してもらうことが難しく、年度ごとに授業内容が異なることが研究の限界である。今後は、教育ボランティアを導入した授業を受けた学生が、受けなかった学生と比べ、この授業の学びがどう生かされたと捉えているのか、あるいは、臨床実習でのアセスメントや看護実践能力に違いがあるのかを明らかにしていく必要がある。

## 謝辞

本研究にご協力頂きました、学生の皆様、教育ボランティアの皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 江川幸二, グレック美鈴, 沼本教子, 他（2010）. 看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価. 神戸市看護大学紀要, 15, 57-66.
- 本田多美枝, 上村朋子（2009）. 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察：教育の特徴及び効果、課題に着目して. 日本赤十字九州国際看護大学, 7, 67-77.
- 今村美幸, 山口求, 光盛友美, 他（2011）. 親の子育て体験談を聴くことによる看護学生の子育て観への効果. 日本小児看護学会誌, 20(1), 107-112.
- 児玉直子, 納富史恵, 藤丸千尋（2009）. 小児看護学における模擬患者を活用したコミュニケーション技術



- 演習の検討, 日本小児看護学会誌, 18(1), 79-84.
- 森戸雅子, 梶原京子, 松本啓子 (2007). 小児がんで子どもを亡くした母親の体験談を聞いた看護学生の思い. 日本看護学会論文集－看護教育－, 37, 224-226.
- 中谷千尋, 森川三郎, 上田康子, 他 (2008). 看護基礎教育における当事者参加授業の教育成果と課題－文献検討を通して－, 目白大学健康科学研究, 1, 139-147.
- 野村幸子, 河上智香, 長谷典子, 他 (2007). 子どもの接触体験から見た看護学生の子どもイメージ. 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 7(1), 169-180.
- 奥山朝子 (2006). 障害児をもつ母親の体験談を聴講しての学生の学び. 日本赤十字秋田短期大学紀要, 10, 33-38.
- 上山和子 (1999). 看護学生の子どもに対するイメージ変化と小児看護学の授業方法について. 新見公立短期大学紀要, 20, 125-133.
- 山口求, 今村美幸, 光盛友美, 他 (2011). 親の自覚を高める看護学生とのワークショップによる親支援. 日本小児看護学会誌, 20(1), 113-119.

(受付：2011.11.1；受理：2012.1.31)